

ほなゐ歴史通信

第69号

2013. 12. 1

豪農の館を見て

先日、新潟県の新津付近へ出掛けた。月岡温泉に一泊してそのあと、近くに「伊藤家」という有名な豪農の館が保存されていると言うので行って見た。入口はさほど驚く程の様子ではなかったが、入館料八〇〇円を払って入ってみるとさすがに広大な屋敷である。庭とか庭園という範囲を超えた広さの庭で、まず目に入るのは樹齢数百年と思われる松の大木が何本も大きく枝を広げて地面を覆っている様子だ。樹木にはソメイヨシノ、八重桜、大山桜、十月桜を初め、コロラドトウヒ、イトヒバ、サンシュユ、ヒメシヤガ、ドウダンツツジ、ヒイラギモクセイ、アスナロ、高野槇、山法師等々が配植されている。

その大木の間に、様々な庭木がきれいに剪定されている。草花類も多く樹木の間に花を覗かせている。ヒメシヤガ、ツワブキなどである。常夜灯らしい施設が所々に配置されていて物々しい。盗難予防や用心の為とは思いますが、夜の景色はどんなだろうと想像してみよう。

古い建造物は「北方文化博物館」になっている。建物は豪農らしく、住宅の外に米倉、味噌倉、その他いくつもの建物がある。草屋根（古民家を移築したもの）を修理中ということもあって、これだけの建造物を維持していくのは大変だろうと考えてしまう。

豪農の感覚は我々では推し量る事は出来ない。もともと屋敷や庭園は「江戸時代から続く越後一の豪農の館」として新潟県の管理経営であると思うが、新潟市旧伊藤家別邸は博物館の隣にある。これも二階造りの豪壮な建物で「大正ロマン馨る新潟屈指の豪農の館」と言う肩書き付きで紹介されている。時間の都合で見学できなかつたのが残念だった。

資料によれば伊藤家は越後壱千町歩の地主で全国的にも有数の規模を誇った地主だった。

母屋の廊下の梁は通し梁で 長さが三〇メートルという見事な杉の木を使っている。

倉には常に米と豆など二〇〇俵余が納められていた。

見事なのは数十冊に及ぶ様々な帳簿の山である。小作米の収納記録や様々な行事の記録等で、結婚式は招待客が多く三日間に亘って行われた様子や、豪勢な献立が記録されている。ほんの一部しか見られなかったが、詳しく見ればこの豪農の暮らしぶりが窺われると思う。さすがに新潟一の豪農の規模の大きさに圧倒される思いである。

日本各地にこのような古い屋敷が残されていると思うが、我が大子町にも残したい建造物（旧木造校舎、旧村役場、現役の木造校舎、中心市街地の商店、板倉、茅葺き民家、長屋門、乾燥小屋、土蔵など）この豪農の様な物でなくても大子地方の特徴を持つ建物は貴重である。一般的な農家の造りでも、それはそれで地方色のある貴重な物である。そういう建造物を保存する事は大子の歴史を知り継承する上で重要な事だと思ふ。豪農ばかりが大事な物でなく、ありふれた物こそ多くの先人が工夫し改良してきた物である。そういう物こそ保存しなければならない郷土の遺産である。

(石井)

「西塩子の回り舞台」から学んだ文化財行政

石井 聖子

本年は、五年ぶりに「西塩子の回り舞台」の組立てが行われ、たった六十戸の集落で組織された保存会主催の十月十九日の本公演に、六千人もの来場者があったという。他の催事や、大子町ふるさと歴史講座受講生の皆さんのように、組立て中の舞台を見学に来てくださった方も多く、舞台の組立てが始まった八月下旬から解体作業が行われた十一月初めまで、会場を訪れた見学者の人数はどれほどになったのだろうか。

「西塩子の回り舞台」は、江戸時代後期、文政年間の道具も残る、回転機構を備えた組立式の農村舞台である。他所への貸し出しも行い、舞台間口は四間から一間ごとに最大七間、花道の長さは四間または六間と、組立場所等に応じて設営し、様々な祭礼の余興として、人形浄瑠璃や歌舞伎の上演が行われてきた。

常陸大宮市域では、回転機構はないものの、他に同じような組立式舞台が、失われたものを含め現在までに六棟確認されているが、茨城県内の他市町村から農村舞台の報告例はなく、特異な文化圏を形成しているといえよう。隣接する常陸太田市や大子町において、今後発見される可能性もある。ぜひとも地域の古老の話に耳を傾けていただきたい。

さて、私は当時、大宮町歴史民俗資料館の嘱託として、幸いなことに、その後の活動のきっかけとなった平成三年度の「西塩子の回り舞台」調査から関わり、舞台保存会の発足、舞台の復元・復活、そして現在の盛況ぶりをつぶさに見せてもらっている。と同時に、地元の人々の苦労や努力の一端に触れ、その折々に文化財行政について、私なりに考える機会をもらってきた。

調査当時「現存する農村舞台の中で最古級の貴重な資料」と報

道された西塩子の舞台は、「組立てなければただの材木の山」との専門家の指摘によって復活への道を辿る事になるが、説得するために訪れた地元の会合で受けた「なぜ五十年前にも前に組立てなくなった舞台を組立てる必要があるのか？」との問いに、私は「貴重な文化財だから・・・」と答えることしかできなかった。しかし、一部の復活に積極的な住民は、当初から「西塩子の回り舞台」を地域再生の起爆剤に、という強い思いを持っていたのである。

その後、時間をかけて地域の人々と話し合いを重ねて行くうち、私にも、主役は「舞台」ではなく、「人」でなくてはならないことが分かってきた。そして、「子どもたちが誇りを持つてふるさを作る」ことを目標とすることで、行政と地元が手を携え、平成九年の復元に漕ぎ着け、その後の活動を続けることが可能となった。

その経験から、文化財を保存・伝承することを優先して地域住民を犠牲にしてはならず、人々の心の拠り所として地域になくはならぬ存在にしてこそ、様々な文化財を大切に守り伝えることができるかと確信するようになった。

とはいえ、あれだけの舞台を二ヶ月あまりの長い期間、組立てて維持し催事をやり遂げることは、特に複数の台風に翻弄された今年など、並大抵の苦労ではなく、日常の仕事もこなしつつ舞台に向かう関係者の心情を思うと、正直なところ不安があった。しかし人々は、急な呼び出しにも笑顔で作業に集まってくれた。

本公演の朝、三日前に通過した台風被害による舞台修復に時間を取られ、準備が万全とはいえぬ中での開幕となった。ひしめく来場者を前に臆せず堂々と口上を述べる少女、そして、それを舞台袖から力いっぱい応援する子どもたち。その姿は、「西塩子の回り舞台」が、地域の子どもたち、ひいては私を含む大人にも、何かを与えてくれる大切な文化財に育っていることを私に伝え、胸の熱くなるのを禁じ得なかった。

(常陸大宮市歴史民俗資料館勤務)

西塩子の「回り舞台」と農村歌舞伎を観て

石井 清

さる十月十九日、常陸大宮市西塩子で五年ぶりに上演された農村歌舞伎を観賞した。これより先の九月下旬、「ふるさと歴史講座」の一環として現地を訪ね、木材の柱や梁のほか青竹三百本を用いて整然と組み立てられた壮大な舞台と、活力にみちた地元の取り組みに魅せられ、本公演当日再び訪れたものである。

私は、学生の頃から足繁く歌舞伎座へかよい、洗練された江戸歌舞伎の狂言と十一代目団十郎はじめ名優たちの至芸を堪能したが、素人歌舞伎を観るのは今回が初めてである。ここでは、当日保存会関係者に伺った話や同会発行のパンフレットを参照したうえ、僅か六十四戸の小さな集落が二〇〇人のボランティアを動かし、公演当日には延べ六千人（茨城新聞）の観客を熱狂させた一大イベントについて紹介したい。

西塩子の回り舞台は、一九九一年の旧大宮町の調査により、江戸時代後期の大道具や古文書を具えた貴重な文化財であることが分かった。そこで九四年、地元の全世帯七〇戸が結束して「西塩子回り舞台保存会」を結成し、九七年には約半世紀ぶりに舞台復元を成功させた。翌九八年、地元若衆による「西若座」を立ちあげ、九九年には日本最古の「組立式農村歌舞伎舞台」として茨城県の有形民俗文化財に指定された。しかし、順調な歩みを辿ってきたわけではない。組立を担ってきた先人たちが世を去り世代が変わると、「なぜ自分たちが回り舞台を継承しなければならないのか」という疑問や不満が噴出した。そこで、保存会内部での粘り強い話し合いや全国的な地芝居関係者と交流する中で、「ふるさとを誇れるものとして、先祖が遺してくれた回り舞台を復活させ、これを地域再生につなげよう」と合意したという。

北塩子の公民館グラウンドに組立てられた舞台は、間口六間、奥行四間、花道六間、回る部分「盆」の直径は二間、床下で四人の人力で回す構造である。舞台をカナメに扇状に広がる客席は屋根のないグラウンドへと延び広がり、公演当日には青いビニールシートの上におよそ七、八百人がぎっしり詰めて座っていた。芝居が最高潮に達した時、前方の客席から紙つぶてのように「おひねり」が飛び、舞台と観衆が一体となって熱気に包まれた。

当日は、子ども歌舞伎が三幕、大人たちの地芝居が三幕上演された。なかでも私が瞠目したのは子ども歌舞伎の舞踊劇「将門」であった。主役の大宅光圀役は中学一年の男子、相手の滝夜叉姫は小学四年の女子である。兩人とも常磐津教室で稽古を積んだ甲斐あって、抑揚の利いたせりふまわしと堂に入った所作で観客を魅了した。常磐津の出語りとして山台に並んだ十人の女子は小学五年生を頭に三年生と二年生であった。

特筆すべきは、学校教育の場と地元保存会がそれぞれ小学生を対象に子ども歌舞伎伝承のため地道な努力を積重ねていることである。すなわち、二〇〇一年に地元の旧塩田小学校（現大宮北小学校）の二年生が総合的な学習授業で始めたのが契機となり、「白浪五人男」と常磐津「子宝三番叟」を習得することがカリキュラムに組み込まれ、代々引き継がれて現在に至っている。また、これに呼応して翌年から回り舞台保存会主催の常磐津教室が開設され、市内全域から集まった小学生が三味線、常磐津節、舞踊の稽古に励んでいるというのであった。子ども歌舞伎の活動を通じて「保存会」と「西若座」の次代を担う人材育成の取り組みと、地域の再生にかける情熱に感銘をうけた。

大子町で伝統文化のさらなる掘り起こし、伝承の担い手を育てる指針と環境づくりを急ぐ必要があることを痛感している。（大子町在住）



筆者撮影「将門」

百段階段誕生秘話

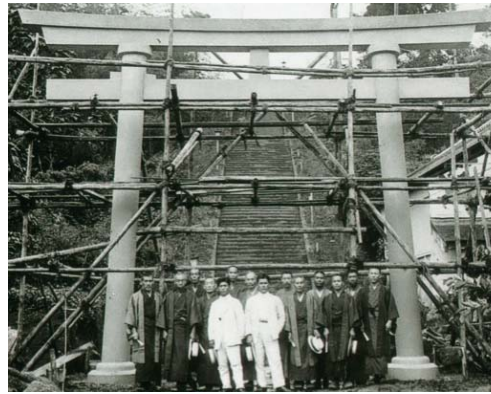
大金 祐介

十二所神社の参道に「百段階段」という名称で親しまれている階段がある。この百段階段は、ひな祭りやキャンドルナイトの会場として用いられるなど、今や大子町の名所の一つになっている。今回は、旧大子町長益子彦五郎が記した『最近大子記事并ニ余町長ノ事蹟』を基本史料としてこの百段階段の誕生経緯を紹介したい。

百段階段誕生の契機は、明治四十三年四月二十四日未明に発生した大子大火であった。この大火により、当時の大子市街の三分の一が焼失し、後山に鎮座していた十二所神社の社殿も焼失してしまった。大火の後、神社再建を求める声が氏子より寄せられるようになると、氏子総代益子彦五郎、黒崎久則、益子恵は、有志を募り、総勢六十一名からなる建築委員会を組織した。そして、外池太一郎を委員会の代表として総代に加え、十二所神社再建に向けた体制が整えられた。総代四名と建築委員会は、この再建事業が十二所神社の社殿その他一切を一举に整備できるまたとない機会と捉え、大規模な再建計画を企図した。計画の中心をなしたのは、神社の遷座と参道の整備で、この参道の整備こそ百段階段を建設することであった。なお、再建事業の経費は、総代や建築委員をはじめとする氏子からの寄付などにより賄われることになった。

再建事業は、前述の体制、計画の下、翌明治四十四年から本格的に開始された。同年中に用地の買収が進められ、その中で大子市街から神社へ通じる参道の、すなわち百段階段の用地として山林宅地合計三畝十六歩が買収された。これは、本町の旧家である益子家と大金家の敷地境界線上の土地に当たり、両家が用地提供

に何らかの形で関わった可能性が高い。百段階段建設工事は、袋田の土木工事請負業者江尻万次郎に発注され、大正二年七月に起



大鳥居落成時の記念写真

工した。この工事は、斜面を土盛りして傾斜を緩くし、その上に石垣を組んで階段を建設するという大工事で、総工費千三百円を要した。百段階段が落成したのは同年十二月二十三日のことであった。なお、百段階段は最初から「百段」階段として計画されたのではなく、その段数が百一段になったのは偶然である可能性が高い。事実、当時の史料には百段階段という名称は登場しない。段数が偶然にも百一段であったところから、後に誰からともなくこの階段を百段階段と呼ぶようになったのだろう。百段階段前の大鳥居が建設されたのは、大正六年六月三十日のことであった。これは、当時大子銀行本店の建設を請け負っていた東京の建設業者木田組の「大鳥居を建設したい」という申し出によるもので、同組は鉄筋コンクリート製の大鳥居をわずか三百七十円で請け負った。

参道の整備が先行する一方で、社殿の建築も進められた。そして、大正七年五月九日、十日の両日に亘って十二所神社遷宮式が開催され、これをもって一連の再建事業は終了したのであった。

このように、百段階段は、明治四十三年の大子大火で焼失した十二所神社の再建事業の中で、大子市街から神社への参道として整備されたのである。

(筑波大学人文学類二年)

大子町城館跡探訪 二

野内 智一郎

二 荒蒔城（大子町町付字館ノ沢一七五〇外）

大子町町付中心部北側を県道二十八号と並んで流れる八溝川のすぐ北方に荒蒔城は位置する。標高三百mを超える高峠山から延びる尾根の一つ、八溝川からの比高は約九十mという山中にその城は築かれている。城跡は現在、木が生い茂る山林となっており、湿地が一部水田とされている以外にはほとんど利用されていない。城域は南北四百m以上に渡り、全体の把握が難しく、曲輪も数多く築かれているが、下図のように大きくI・II・IIIに分けられる。曲輪の多くは概ね山を背に南側を向いて築かれており、主郭部が尾根先端の最高地点に比定されている。今回、主郭部に辿り着けず実際に確認することができなかったが、主郭部の土塁が川原石で石垣状に覆われているという。依上に限らず佐竹氏の城には明確な石垣が確認されていないため、城が使用されていた当時の遺構であるとすると非常に稀且つ貴重なものであるといえる。荒蒔城の東七百mには町付城があり、現在その間に存在する寺院や民家も城域としての想定ができる。

荒蒔城は佐竹氏の家臣、荒蒔氏が戦国期の永祿年間（一五五八～一五七〇）に築いたとされる。永正七年（一五二〇）以来の佐竹氏の依上保経営に現地で大きく関わった荒蒔氏は手狭となった町付城を出て荒蒔城に移る。町付城は、比高はある程度あるものの上部は平坦となっている。それに対し、荒蒔城は山上に設けられ、守りも非常に堅固である。戦国も後半に入った永祿年間、全国的に戦乱が広がっていった時期であり、佐竹氏の勢力の充実・安定がこのような大規模な築城を可能にしたと考えられよう。政庁と

しての機能を持ち、存続した可能性のある町付城とセットで依上の中心城郭と考えることができる。

また、城域周辺には二つの寺院が存在する。荒蒔城・町付城の性格を探る上でこれらの寺院について知ることは重要であろう。以下に寺院の概要を述べる。

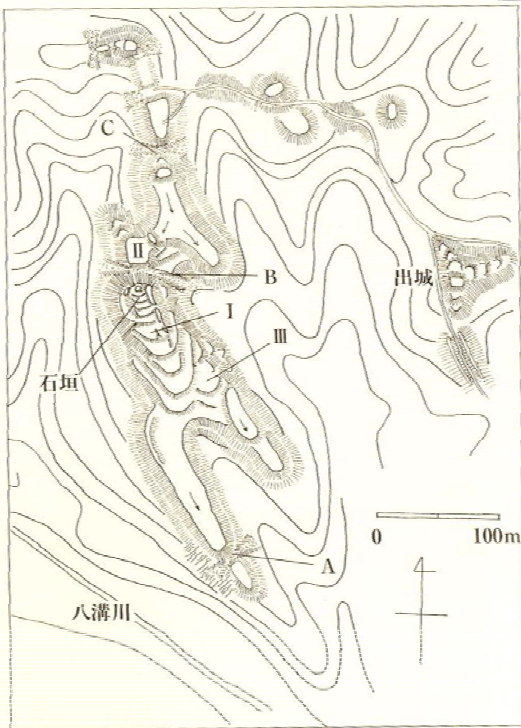
○慈雲寺（大子町町付一五四六）

仁平二年（一一五二）、意教上人の開山である真言宗系寺院であり、本尊は千手観世音菩薩。弘安三年（一二八〇）建立とされる山門が今も残る。

○高德寺（大子町上郷二〇五六）

永正元年（一五〇四）の創建で、荒蒔氏の外護により、永祿六年（一五六三）に興されたという。現在の本尊は釈迦如来。木造茅葺きの山門は町指定有形文化財に登録されており、室町時代末期の様相を呈する。

（龍ヶ崎市在住）



荒蒔城縄張図『図説 茨城の城郭』

新聞記事にみる満州移民の断片（一二）

— 第九次冷家店大子町開拓団の軌跡 —

昭和十六年七月四日付「いはらき」新聞に掲載された菅井正維記者による視察報告の続きである。菅井記者は、大子町開拓団の当時の農業事情についてもふれている。

昭和十六年度の作付面積は、水稻三〇町歩、大豆二五町歩、小麦二五町歩、燕麥三五町歩、粟二五町歩、包米（唐黍）一〇町歩、高粱二〇町歩、大麦五町歩、陸稻一一町歩、蔬菜二〇町歩、馬鈴薯一〇町歩で、合計すると二一六町歩に達し、「秋末三万円乃至五万円の収穫を挙げんとしてゐる」と伝えた。前年の四月、渡満して間もない先遣隊が満州の農地で試みたのは水田二五町歩と畑作五六町歩であった（本誌第五三三号参照）ことを想起するならば、開拓二年目にして作付面積は大きく拡がっていることがわかる。

菅井記者は、さらに続ける。「耕地面積は部落計画による三百戸完成まで逐次増加一路を辿り、五百戸まで増加の計画さへあり、幸ひにして本開拓団には前項（本誌第五九号参照—筆者）の如き膨大ななる面積の水田並に湿地帯を包容し烏拉河の治水工事完成後は広茫たる湿地帯が一面に豊饒なる水田となり畑地の大面積と共に水陸交通に恵まれた一大農場と化し不朽の金字塔が現在の開拓先進隊の上に輝くであらう」と。戸数といい、また農場の将来像といい、まさにバラ色の世界が展望されていた。

しかし菅井記者は、大陸での農業経営と日本のそれとの間にみられる想像以上の「違い」を指摘することも忘れなかった。曰く、「本団の作業その他には幾多のナンセンスがある、何分にも畑地の畦の長さが千米にも達してゐるため除草は普通一日二本の畦をやれば日が暮れてしまふ、水田は昨年初めて十町歩を試作し二丁寧に植付を終つたその晩鳴の大群に見舞はれてその全部を搔廻さ

れ一晩で全滅されてしまつたため昨年は水田を諦め本年は早春より水田班を設け面積も三十町歩に拡大、各所に監視所を置き鴨の襲来に備へ既に植付を了し昨年分を取返す意気込でゐる、尚又陸稻も本年度最初の試みとして十一町歩播種したが試作に十一町歩などゝは満洲だからこそ出来る相談で内地などでは夢にも見られぬところである」。菅井記者が「ナンセンス」と表現した「千米にも達」する畦の長さや一一町歩という試作の規模の大きさだけでなく、他にも例えば畝幅は一メートル、地温を高く保つために畝の高さは五〇センチにもなること、夏と秋の期間が短くすぐに冬が到来するため作物の生育期間も短いことなど「違い」は諸処にみられた。この「違い」に、開拓に入った人たち誰もが共通して戸惑うこととなる。

その一人が、昭和十五年四月に農事指導員として赴任した齊藤良治である。次のように述べる。「口では二十町歩三十町歩と言うがその畑地は広大なもので畦の長さが千メートル以上千五百位あります。長さが千メートルの場合二十町歩であれば幅が二〇〇メートル必要です。誠に広い畑で一人や二人では耕作が出来るかどうか、想像がつかない。なぜなら内地に於ては最高二町歩止りが限界であります。然し日本内地と満州では単位収穫量が異り満州の方が少い、日本で一〇割を獲れば満州で六割位ではないか。日本農業は集約農業。満州は疎放農業と言われて居ります。満州は一年一作、日本は二作から三作は可能です。耕地に就いては、黒々とした立派で肥沃な農地を耕作して居る。これは満人の祖先が何十代か何百代か前から此の地に来て荒地を耕し努力を傾注した結果肥沃な熟地にしたものと思われまふ。此の様に肥沃な大面積農地を彼等は耕作しているが、私達が実際にやってみて出来るではありませんようか。…実は私共指導員に課せられた宿題でもある訳です（開拓の記録）。農業の専門家齊藤の戸惑いは深い。この「宿題」を、齊藤はどう打開したのであろうか。

（齋藤）

昭和二年、大子駅開通式における根本正代議士の祝辞

明治四十四年(一九一)に建議案を議會に提出して以来、水郡線建設に情熱を燃やし続けた根本正が、三月十日、大子駅開通式にのぞんで次のような祝辞を述べた(『水郡鉄道建設史』)。

「昭和二年三月十日、大郡線(大宮駅と郡山駅間―引用者)における最も重要な地位を占む大子駅開通式を見るに至りたるは、単に保内郷における利益の増進に止まらず、国力発展の上においても亦大に祝賀せざるを得ず。

大郡線は元來水郡線の一部にして、今を去る十七年前、すなわち明治四十四年三月帝國議會第二七回の開會において本線の必要なることを建議し、その通過を見る。爾來これが速成の建議を提出し、可決せられしこと三回の多きに及び、大正三年三月第三一回議會においてその予算は可決せられ、同年五月一日工事の着手は鐵道省告示第三一号を以て發表せられたるにも拘わらず、政変のため本線の一部を私設鐵道会社へ認可せられんとせしを以て、その五年二月、余は事の不当なるを政府、すなわち大隈内閣に質問せし事二回に及びたり。：

本日大子駅開通式に当り余は第一に板垣伯の唱導せる鐵道国有政策に対し、熱誠を以て感謝せざるを得ず。第二に感謝すべきは明治四十四年以來今日まで、鐵道總裁及大臣たりし十一名のうち原敬、床次竹二郎、元田肇の三大臣に対して敬意を表す。特に原君は最初本建議案を容れられ、床次君は最初の予算を提出せられ、また元田君は最後の予算実行のため。またその当時建設部の重職にありたる床次、元田両大臣を助けたるは鐵道次官工学博士石丸重美君なり。石丸君は建議案通過せらるゝや、直に自ら水郡線調査のため出張せられたる上より見れば、石丸君がいかにその職務に忠実、かつ献身犠牲の仁たりしかを証明するに足る。

またこの保内郷にありて尽力せられたるは神永秀介、益子彦五郎、石井栄次郎、桜岡力、外池太一郎君の諸君なり。：

本線が過去七十七年の永き星霜をへ、こゝに大子駅通過を視るに至りたる所以のものは、実に一朝一夕の業にあらず。：

本日大子駅開通の式に当り、彼を懐い此を思い、国力發展上より滿腔の誠意を披瀝し謹しみて祝辞を呈す。」

根本正が、鐵道建設に尽力したとのべた袋田村長桜岡力が、その年の十二月二十三日に死去する。根本正は、次の弔辞を述べている(益子彦五郎所藏文書)。

「桜岡力君の靈に白す

君は保内郷の名門に生れ、幼にして

中村敬宇(正直―引用者)先生の同人社に於て英学を

勉強し、地方に在り、克く共立共栄の

主義に基き、村治を始め、民政に尽力、

特に水郡鐵道開設の爲め、明治四十

四年鐵道省石丸次官出張の節は、

同伴、旬日旅行を共にし、全線調査遂に

本線開通に至りたる所以のも、実に尽力

大也し、今や君、昇天せらる、永久天榮に

在り、君の偉大なる勲功を謝し、茲に蓮花を

供へ、謹て、敬弔の意を表す

昭和二年十二月二十五日 勲三等 根本正

この大子駅開通により、水郡線の各駅には運送店が相次いで開設された。八溝山一帯を中心に産出する木材、木炭、薪などの林産物、葉たばこ、大麦、楮(こうぞ)、蒟蒻(こんにやく)など農産物の輸送が可能になり、商工業が發展していく。

同時に、保内郷と呼ばれていた、生瀬村・宮川村・黒沢村・依上村・佐原村・大子町・袋田村・上小川村・下小川村の一町八か村が、大子地方としてまとっていったのである。(野内)

ふるさと歴史講座「現地巡り」を終えて

現在大子町では、「文化遺産を活かした地域活性化事業」が始まり、歴史や伝統文化、文化財の保護に一層力を入れて取り組んでいるところである。そうした中、お隣の常陸大宮市では歴史民俗資料館を中心に、地域での伝統文化を保存・継承していく活動が活発に行われていることを知った。そこで、隣の市町村との交流から郷土理解や文化・伝統の継承について理解を深めることを目的に、九月二十八日（土）に「常陸大宮市の文化財活用と伝統の継承について学ぶ」というテーマで常陸大宮市歴史民俗資料館の石井聖子さんを講師に迎え、参加者三十五名で歴史講座の現地巡りを行った。



現地巡り当日「回り舞台見学」

今回のコースは、旧山方町の民具を展示している歴史民俗資料館 山方館で民具の保管状況や展示を見学し、その後、市内における歴史資料や遺物を展示している歴史民俗資料館 大宮館で、人面土器やヒスイの硬玉など豊富な考古遺物の展示を見学した。辰口親水公園で昼食を取り、石井さんから辰口用水堀の説明を受けた。最後に、現存する日本最古の組み立て式農村歌舞伎舞台である、西塩子の回り舞台の組み立て現場に行き、実際に組立作業をしている地元の方々からお話を伺って交流をはかることができた。

ここで、参加した方の感想を一部紹介したい。

普段何気なく通り過ぎていた常陸大宮市ですが、歴史民俗資料館 山方館、大宮館ともによく整備され、解説も良かった。鏡岩や人面付土器など初めて見て感動しました。

(六十代 男性)

わずか六十から七十戸の集落でこの大きな文化遺産を伝承継承していることは大変すばらしいことだ。地域全体で協力して残し伝え、絶やさないことを祈る。そこに住む住民が、その大切さを知らずにおろことが意外に多いので、まず多くの人があることより始めることが大切と痛感する。

(六十代 男性)

無関心ほど怖いものはない。関心を持ち、関係を持ち続ければ収穫は大きいと感じました。

(七十代 男性)

今回の現地巡りでは私たち教育委員会としてもたくさんの方を学び、考えさせられた。今回常陸大宮市から学んだことを活かして今後も文化遺産を保存・活用する事業に取り組んでいきたい。

(家田)



歌舞伎公演当日の様子
(石井清氏撮影)

編集 大子遊史の会

編集人 齋藤 典生 (茨城大学教育学部特任教授)

野内 正美 (茨城県立歴史館資料調査員)

石井喜志夫 (元大子町史編纂委員会委員)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館

☎ 0295 (72) 1148